

# JPSニュース=487

公益社団法人日本写真家協会 JAPAN PROFESSIONAL PHOTOGRAPHERS SOCIETY  
〒102-0082 東京都千代田区一番町25番地JCIビル303 TEL 03-3265-7451 FAX 03-3265-7460

P 4 第36回2011JPS展東京展報告

P 8~9 東日本大震災支援情報

主な  
記事

P 7 インドネシア写真家と国際交流

P 12 23年度事業のお知らせ

## 東日本大震災支援情報

### 東日本の被災地を訪ねる ユニセフ親善大使

日本生まれの国際共通語にパチンコ、カラオケ、ツナミがある。前の二つは日本で出来たものだが、ツナミがなぜ国際共通語になっているか分からない。それだけ多く日本の国土はツナミに襲われているのではなかろうか。

私は、84年黒柳徹子さんがユニセフ親善大使になって以来、毎年行われる親善訪問に同行取材をしている。初期はアフリカ大陸の早魃に苦しむ国々であった。それが次第に内戦や紛争国を訪ねることが多くなった。直接の原因が食糧難による飢餓であっても、その背後にあるのは内戦によるものであった。しかし、近年になると自然災害が加わってきた。

2004年にインドネシアのスマトラ島沖の大地震による津波で死者17万人、行方不明者27万人を出した。ユニセフ親善大使黒柳徹子さんは被災後のスマトラ島の州都バンダ・アーチェを訪ねた。市街はほとんど津波で流されていた。その津波のエネルギーのすごさに目を見張る思いであった。その時の話では15mから30mの津波であると説明され、そんな大津波が来るのものかと半信半疑であった。ところが今年の3月11日にそれよりも大きな津波が東日本を襲ったのである。それも南北にかけた500kmの海岸地帯の全域である。

黒柳親善大使は、今年の4月カリブ海の国ハイチを訪問している。昨年の1月ハイチは大地震に襲われ、およそ22万人の死者を出した。昨年訪問を予定したが政情不安で許可がおりず、今年訪問となったのである。首都のポルトープランスの街は大統領府や財務省など今だに倒壊したままの建物の残骸が残っており、その中を国民は懸命に生きていた。ある中学を訪ねると、昨年被災した際に札幌の女子中学校からお見舞いのカードを頂いた。今度は私たちがお見舞いのカードを出すの



だと黒柳親善大使に絵手紙を託した。大使はそれを宮城県亶理町の被災小学校の学童にとどけ、震災後のハイチについて学童たちにお話をした。因みに亶理町の荒浜小学校は海岸に近かったが、小学校は土盛りした上に建ていたので2階3階に逃げ幸い死者は出なかったが、学校周



宮城県亶理町荒浜小の学童。校舎が使えなくなり、同じ町の逢隈小学校の一部を借りて授業。黒柳ユニセフ親善大使からハイチ地震の話聞く。

辺の民家は流失被害を受け人が住めない。高台にある逢隈小学校の教室を借り授業を行っていた。

今、東日本の被災者は、地震に加え大津波に襲われ、福島原発事故と未曾有の被災にあっている。一日も早い復興と、再建を願い、支援を続けねばならない。また、この教訓を写真で後世に伝え残すのは写真家の責務である。

(記・撮影/田沼武能)

# 東日本大震



## ●藤井勝治会員

4月12日早朝に被災地に向けて東京を出発する。東北道をひた走るが、ガソリンの給油不安が残るので100km毎に給油をする。仙台若林JCTを過ぎ、突然津波の跡が目飛び込んでくる。辺り一帯は酷いことになっていた。その周辺では、すれ違う車は支援物資を運ぶトラックや、警察、自衛隊車両が目立つ様になった。

その後、南三陸町志津川に入り、津波跡の光景が突然現れる。私は呆然とし、そしてシャッターを切り続けた。気仙沼では塩土砂、魚などの異臭が鼻を突く。猫の死体も目にする。陸前高田は噂通り全てが壊滅していた。名取市で遺体安置所の取材許可はおりたが、撮影は禁止であった。

仙台空港とその付近一帯、山元町避難所、相馬市一帯、南相馬、内陸経由で浪江町に入る。町からは人影が消えていた。マスクを2重にして車内から撮影を行う。目で見ることの出来ない放射線はさすがに怖かった。

上記の様な行程での3日間の取材だった。写真家として実際現場に入り、記録し、伝えることが我々の使命だと思う。

## ●西村満会員 「思い出探し」



潮の香りが無い海。鳥や犬や猫や人の気配、生活の匂いや音などそこにはなかった。

被災から2カ月経った宮城県南三陸町の志津川へボランティアで訪れた。壊滅した状況を見て

無言。5日分の食料と置いて帰るつもりで自転車も持ち込む。朝、ボランティアセンターへ出向き何でもやりますと申し込み、職業は写真家と答えると「これはよかったプロがいれば心強いから」と写真の救済作業を連日頼まれ、長靴とヘルメットは活き場を失った。自衛隊が被災地で拾い集めた写真やアルバム。津波にのまれ付着した海水、泥を真水に浸し毛筆で洗い落とす。匂いもあり手間のかかる作業。膜面は剥がれやすく要注意。乾燥後は展示をして被災者に思い出の写真を探してもらっている。「家族写真は記念としての写真の原点である」ことを南三陸町で強く思った。

写真の底力を見せたいものです。

## ●山口規子会員

私が被災地に赴いたのは被災から約2カ月半後。



新聞や雑誌、テレビでの報道を見ながら仕事の日程にかこつけて内心行くべきかどうか悩んでいた。実際行ってみると報道とは程遠い現実を見た。「やっぱり来てよかった。」潮をかぶった土地は滑り易く、潮と汚物の混じった匂いが鼻をついた。撮影し始めると津波で

流された瓦礫はあちこちにまとめられ、動かせない自動車や戸が全部外された家々がポツンポツンと寂しそうに建っていた。各雑誌で掲載された被災地の写真を見ていた頃、被災地をアート作品を撮るかのように写すのはなぜだろうと考えていたがその謎が解けた。人間の手では創造できない姿だからだ。不謹慎ではあるが、津波という力が神々しいまでに作り上げた風景だった。

そして夜は地元の飲み屋で人々の話を聞いた。100人聞けば100人の物語がでてくる。私の頭の中は彼らの話と自分の撮った写真との狭間でこれからも悩み続けることになるだろう。合掌。

# 災支援情報

## ●大沼英樹会員

震災後、被災地をまわり撮影しました桜の写真  
を急遽、写真集として  
7月の18日の海の日に  
窓社より出版する事  
になりました。前回の写  
真集とは違いすこし重  
い内容ですが、テーマ  
はやはり「命」です。  
だんだんと「被災地の  
映像はもう見たくない。  
忘れない」との空気な  
ってきました。



辛い気持ちを前向き  
に生きる事は大切な事  
です。が、現実逃避やあ  
の瞬間大きく変わった  
価値観命の大切さ、人  
間の暖かさ、自然に生  
かされている事等の考  
えがいつのまにか経済  
優先になる事を恐れます。

この桜たちは、どんな  
に厳しくても必ず咲く  
東北人の魂です。写真  
集「それでも咲いてい  
た千年桜」7/18発売  
予定。

## ●鈴木一雄会員 桜の写真集を携えて



私は、東日本大震災の発生後に福島県出身の自  
分に何ができるかを考えました（被災した親戚を  
見舞うこと以外に）。そして義援金支援の他に、昨  
年に発刊された私の桜の写真集「櫻乃聲」を持参  
して避難所を訪問することを思い立ったのです。  
避難所生活で桜を愛でることもかなわぬ方々に少  
しでも花見気分になっていただき、やすらぎが生  
まれるようにと願ってのことでした。

福島県の避難所をできる限り訪問し、写真集を  
すべての避難所、そして岩手や宮城にも巡回させ

るシステムにしたかったのですが、混乱している  
状況下では無理でした。最終的には、120冊の桜の  
写真集を用意して6カ所の避難所を訪問しました。  
それらの中には、通路に至るまで段ボールで狭い  
空間を仕切って生活している避難所もあり、目に  
する私自身も辛いものでした。それでも、若い夫  
婦から80歳を超えるお婆さんまで何人もの笑顔に  
接することができたのが、せめてもの救いでした。

## ●熊谷正会員 被災地・福島相馬での記念撮影行



上：元気な笑顔で迎えてくれた相馬保育園の子どもたち  
下：松川浦港 津波に向かって沖に出た船が100隻ほど  
無事帰港したが、未だ漁の再開の目処が立っていない。

被災3カ月目を迎える直前の6月8日～10日ま  
で、会員のブルース・オズボーン氏が推進する「親  
子の日」被災地訪問プロジェクトに賛同した写真  
家たち総勢10名で、家族の写真撮影と子どもたち  
への写真教室開催を目的に福島県の相馬市に行った。

海岸一帯の家々が流され、空爆があったように  
変わり果てた状況に茫然。また高さのある農道を  
隔て、海側の壊滅した土地と陸側の田植えが終わ  
った田んぼが続く風景の違いに、津波の不条理を  
感じ驚く。

原発から40km圏内地域のため、放射能汚染を心  
配する住民の気持ちを考えると複雑な想いになっ  
たが、避難所に避難した方々や保育園の子ども  
たちの記念撮影には、目一杯の元気な笑顔を見せ  
てくれ、こちらの方が逆に元気をもらうことが  
できた。長い年月がかかる今後の復興に、陰ながら  
応援する気持ちをいつまでも忘れずにいなければ  
と思う。

「東日本大震災支援情報」の掲載記事を募集して  
います。写真を添えて、総務までお寄せ下さい。